第四章　広尾原枯れ尾花（かれおばな）

一

腹を空かした坂崎磐音は布団の仲で思案していた。

茶色に染まった障子越しに差し込む夕暮れ前の光も張るののどけさが漂っていた。

（明日の朝まで我慢するか、蕎麦でも食いに出るか）

大の男が深刻に考えることではない。だが、懐に二十六文しかないとなると考えざるをえない。

「坂崎さん、いる」

おこんの声がした。

「いますと」

腰高障子が開けられ、

「あれ、風邪でも引いたの」

と両替商今津屋の奥向きの女中で、金兵衛の娘のおこんが狭い土間で立ち竦んだ。

磐音はのろのろと起き上がり、夜具を部屋の隅に引きずっていった。

「いや、風邪ではない。腹が減らないように横になっていただけだ」

「呆れた」

と呟いたおこんが、

「これじゃあ、仕事があってもできそうにないわね」

と言った。

「いや、仕事ならばちゃんといたす」

「両国橋を渡って今津屋まで生けば御飯食べられるわ」

「仕事もせずに飯だけを馳走してもらうわけにはいかん」

「だから仕事と言ったでしょ」

さようかと答えた磐音の言葉に喜びが溢れた。

慌てて裾のほつれた袴を着けて髪をてで撫で付ければ、それで支度が終わりだ。

備前包平二尺七寸と無銘の脇差しを帯に差し落として、長屋の路地に立って待つおこんに、

「おまたせいたした」

と声をかけた。するとおこんが、

「上野伊織様からの手紙…」

と差し出した。

「おお、これはわざわざ届けていただいて相済まぬ」

受け取った封書（ふうしょ）を差し上げて感謝した磐音は懐に仕舞った。

「坂崎さん苦労するわね」

「苦労は買ってでもせよと申すが、こう続くとなあ」

のんびりと答える磐音の顔をおこんが覗き込み、顔を横に振った。

「蝋燭屋の明石屋さんもお金になったとは思えないけど…」

「なにしろ約束された主どのが死ぬか生きるかの瀬戸際（せとぎわ）ではな、日当を払ってくださいとも言えぬ」

「取りはぐれたな」

「品川さんが恐縮しておった」

明石屋の騒ぎは読売（よみうり）で報じられたのでおこんも知っていた。

「うちの老分番頭さんも、坂崎はなかなかの人物だが、最後の詰めが甘いといつもおっしゃっているわ」

二人は両国橋に差しかかった。

まだかすかな残光が橋と川面（かわも）の間に漂い残っていた。

二人連れの職人が道具箱を担いで、西から東に家路（いえじ）を辿り、小僧に荷を担がせた番頭が店へと戻る。鬢付け油（びんつけあぶら）の匂いをさせた髪結い女は得意先から戻るところか。

川面には、木材（もくざい）を組んだ筏（いかだ）や、俵を積んだ荷足舟（にたりぶね）、吉原通いの客を載せた猪牙舟が行き交っていた。

橋を渡って両国西広小路を抜ければ、六百余軒の両替商でも一、二を争う今津屋の分銅（ふんどう）看板が見えた。むろんまだ店の大戸は開いていた。

「老分さん、お連れしましたよ」

おこんが大勢の奉公人を仕切る大番頭の由蔵に声をかけた。

両替商の雇い人（やといにん）は特別な呼び名があった。

丁稚（でっち）、振場役（ふりばやく）、秤方（はかりやく）、帳合方（ちょうあいかた）、支配人、そして、最後に昇りつめるのが別家（べっけ）格を許された老分だ。

「おお、来なさったか」

「老分どの、早速お世話をかけたな」

のんびりと手紙の礼を述べる磐音をおこんは奥へ連れ込んだ。連れて行かれたのは広い台所で、大勢の奉公人のための夕餉が行われていた。

「はい、そこに座って」

深川育ちのちゃきちゃきした言葉遣いそのままに、おこんが一つだけ用意されていた箱膳の前に磐音を座らせた。

膳にはすでに鰆（さわら）の焼き物やら鶏と里芋、人参などの煮物などが並んでいた。

「おこんさん、馳走になってよいのか」

「腹が減っては戦もできないわ。番頭さんのお供でお仕事ですからね、たんと食べてくださいな」

「なれば遠慮なくいただく」

磐音は箸を持った両手で合掌（がっしょう）して食べ物に感謝すると、まず味噌汁の椀（わん）を取り上げた。

こうなるとだれが声をかけても上の空（うわのそら）だ。

「出が出だもの、鷹揚（おうよう）なもんだわ」

おこんの言葉ももはや磐音の耳には届かなかった。

「いいこと、食べたら奥に来て」

おこんが顔を突き出していった。

「相分かった」

磐音は無意識のうちに返事をするとたべることに没頭していった。

満腹した腹を抱えて台所を出るとおこんに、

「はいはい、こっち」

と男の髪結いが待つ部屋に通された。

「へえ、こちらに」

無精髭を当たられ、髷をゆい直された。さらには別の座敷に連れて行かれて、

「これに着替えるの」

とお納戸色（なんどいろ）の真新しい羽織袴を差し出された。

「着替えねばならぬほどのところへお供をするのか」

「うちのお客様は大名、高家（こうけ）旗本が多いの」

はあと空返事をした磐音は、埃臭い袷から真新しい衣服に着替えた。

「はい、これ」

と白扇（はくせん）までおこんに持たされ、前から後ろから子細（しさい）に点検されて、

「これならば立派な若様だわ」

と呟いた。

「おおっ、これならどちらが供か分かりませんな」

角樽（つのだる）を提げた小僧の宮松を伴った由蔵も言う。

「行ってらっしゃいまし」

支配人らの見送りを受けて、由蔵と磐音らは外に出た。

三人は神田川右岸（うがん）を遡った。

「坂崎様には説明の要もないと思いますがな、両替屋の商いの一つに、金を預かっては運用する、また金を貸し付けては利息を頂戴するという預かり金無利子、

由蔵が不意に言い出した。

小僧が離れて歩いていた。

「うちの貸付は商いをなさる店が多いのですが、中には高家旗本もございます。これから訪ねる元中奥御小姓衆の岡倉美作守（おかくらみまさかのかみ）様三千七百石もその一つにございます。先代は御小姓衆としてなかなかの人物、羽振りもようございました。ところが当代の恒彰（つねあき）様は、遊び好き、酒好きが高じて交代寄合入りに落とされた。御役がつくとつかないとでは極楽と地獄です。恒彰様はこの五年内に今津屋から八百五十両の借財をなさておられます。いえ、これには利息が入っておりません」

「さすがに今津屋どの、鷹揚なものですな」

「鷹揚なものですか。ない袖は振れぬと居直られると、直参（じきさん）旗本、なんとも手の打ちようがございません。ところがな、甲府勤番支配に就かれて支度金が出たという話を小耳にしましてな、幾分でもご返却をと参るところにございますよ」

由蔵は神田川に架かる昌平橋で左岸に渡り、聖堂脇の坂を上がりつめて水道橋の袂（たもと）の長屋の前で足を止めた。

玄関の傍らには乗り物が三挺まっていた。

由蔵が玄関番の若侍に名乗ると奥に引っ込んだ。が、すぐに初老の用人と戻ってきた。

「おお、これは今津屋の番頭ではないか」

用人はちらりと小僧の抱える角樽（つのだる）を見た。

「この足袋、御役に戻られたとお聞きいたしました。おめでとうございます」

「さすがは今津屋、耳が早いな」

「御城の動きをだれよりも早く察知できなければこの商いはできませぬ」

「そうかそうか、今も殿様はお仲間衆と祝酒を飲んでおられる。ささ、こちらに上がるがよい」

由蔵は玄関に小僧を待たせ、角樽を持とうとした。

「それがしが」

磐音が手を出した。

用人は侍姿の磐音を困ったように見たが、何も言わずに廊下の奥へと案内した。

庭に面した二間続きの座敷では行灯（あんどん）の明かりが皓々と点され、四人の武家と柳原辺りから呼ばれた様子の芸者衆が宴会の真っ最中であった。

鳴り物がやんだ。

「おお、今津屋の番頭か」

巨漢の岡倉美作（みまさか）守恒彰が老化に平伏した由蔵を見た。

「殿様、この足袋は御役にお就きになられたそうで祝着（しゅうちゃく）極にございます。

「由蔵、御役だと。甲府へ山流しだぞ」

甲府城は柳沢吉里が大和に藩替えになって以来、幕府が直轄（ちょっかつ）管理した。

江戸育ちの旗本は山に囲まれた甲府勤番を山流しと称して嫌った。

「とは仰せられますが、お役料千石、実入りは悪くないと聞き及んでおります。それに甲府勤番を勤め上げれば、御小姓組番頭に抜擢（ばってき）されます。」

「なにが抜擢か、もともとわが岡倉家は小姓組番頭の家柄であったわ」

不機嫌になった恒彰は、

「今津屋、祝を受け取った」

と用事は済んだという顔をした。

「殿様、お楽しみのところまことに申し訳ございませんが、ちと別室にてお時間を頂きとうございます」

「なにっ、座を替えろともうすか」

「いえ、ほんのしばらくにございます」

「番頭、この場にて申せ。ここにおるのは親しき朋輩ばかり…」

「いえ、ここではすこしばかり差し障りがございます」

「言えぬと言うか。ならば後日（ごじつ）にいたせ」

恒彰は由蔵の要件が分かった上で無理を言っていた。

「それではこちらの商いが立ち行きませぬ」

「なにっ、番頭、そなたは祝いに駆けつけたと思うたか、金の取り立てか。酒がまずうなるわ、帰れ帰れ！」

そこまで言われた由蔵は、居住まいを正した。

「殿様、うちは金子（きんす）をお貸しして利息をいただくのが商いにございます。むろん期限付きの約定を交わしてございます。こちら様にはこれまでかなりの額の金子を用立ててございます。それが期限が過ぎても元金どころか利息の一分すらご返却頂いておりません。御役に就かれたとお聞きして、融通した金子を幾分でもとお願いに上がった次第…」

顔を青くした用人が由蔵の袖を引っ張った。

が、由蔵も今津屋の別家格まで登りつめた男だ。梃子（てこ）でも動く気はない。

「面白い！」

と手にしていた大杯を投げ捨てた恒彰が、

「今津屋、用心棒まで連れて借金の催促か」

磐音を睨んだ。

が、磐音は飯をたらふくいただいたばかり、幸福そうな顔でニコニコと笑っていた。

「よかろう、払ってやろう」

「ありがとうございます」

「その前にひと差し舞うのを見物せい！」

よろよろと立ち上がった恒彰は立て切られた襖（ふすま）を開け、長押（なげし）にかけられた黒柄の槍を掴むと小脇に抱え、革鞘を抜き捨て、宴の中央に仁王立ち（におうだち）になった。

「番頭、ようみておれ。少しでも動くと岡倉家伝来の青龍切り、自慢の穂先（ほさき）の田楽刺しになるぞ」

芸者たちが慌てて隣室に引いた。

由蔵は微動だにしない。

「酒は飲め飲め飲むならば、日の本一のこの槍を、飲みとるほどに…」

ヨロヨロとした恒彰が、由蔵の眼前に穂先を突き出した。

穂先が行灯の光にきらめいて、由蔵の体の三、四寸手前でなんとか止まった。

「岡倉様、お相手つかまつる」

おこんが持たせた白扇を手に磐音が立ち上がり、穂先の前に身を晒した。

「用心棒風情めが！」

恒彰が槍先を磐音に向けた。

「そのほうが望んでの舞じゃ。死の舞になっても知らぬぞ」

恒彰は存分に槍を手元に引きつけると磐音の胸に繰り出した。

磐音の白扇も舞動いて、びたりと槍の千段巻（せんだんまき）に当てられた。

「おのれ！」

恒彰は槍を手元に引こうとした。だが、どうなっているのか、白扇をぴたりと千段巻に当てられた槍はびくとも動かなかった。

恒彰が強引に引き抜くと、よろめく体勢も構わず、磐音の胸を本気で刺し通す気で突き出した。

磐音の扇子が踊って、穂先を叩いた。すると黒柄の槍が庭に向かって飛んでいった。

呆然と立ち竦む恒彰に、

「岡倉のどの様、座興（ざきょう）はこれまでにお願いいたします。わが連れは神田三崎町の佐々木玲圓道場で修業を積んだ者でこざいます」

と由蔵が言い放った。

「何、直心影流佐々木道場か」

若い旗本が片膝を立てて刀を引き寄せた。

「今津屋、こ、こちらに参れ、殿は最初から金子を用意されておられたのじゃ」

と用人はその場を言い繕うと、由蔵と磐音を従えて座敷を離れた。

「さすが板崎様、お陰さまにて三百両を返して頂きました」

緊張を解いた由蔵が言い出したのは昌平坂にかかる辺りだ。

宮松の持つ提灯の明かりがちらちらと道を照らした。

「冷や汗をたっぷり買いましたよ。あれで三百両ではとても間尺（ましゃく）に合いません」

「いや、まだ終わってはおらぬようです」

足音が三人の後方に響いた。

岡倉家の宴にいた若い旗本と岡倉家の家臣だろう、五人が追いかけてきた。

宮松が堀端に逃げた。

それでも提灯の明かりを保持していた。

「座興はお屋敷で住みました。江戸市中で刀を振り回しては、お旗本の沽券にかかわりますぞ」

由蔵が諌めた（いさめる）。

「問答無用」

若い旗本が剣を抜いた。

「あれを見逃しては我ら直参の面子（めんつ）に関わる」

「およしなさればよいものを…」

そう言った由蔵が小僧の傍らに身を引いた。

「宮松、しっかりと明かりを照らしなれ」

磐音は五人の前に春風に吹かれる柳のように立っていた。

「参る！」

若い旗本が正眼に剣を構えた。

四人の仲間は後詰（ごづめ）に回るつもりか、その背後についた。剣の柄に手を置いていたがすぐには抜く気はないようだ。

磐音は備前国の刀鍛冶（かたなかじ）包平が鍛えた業物二尺七寸を抜く峰に返した。

「小馬鹿にしおって！」

罵りの言葉とともに怒涛のように押し寄せてきた。

道場剣法ながら腕に覚えがあるのであろう。

なかなかの太刀筋で正眼の剣が伸びて、磐音の小手にきた。

磐音も走りざまに迎え撃ち、峰に返した包平ですりあわせた。

相手の剣の攻撃がふわりと絡めとられた。

剣の勢いがそがれた（殺ぐ）。

相手は磐音の胴にとも攻撃を連鎖させた。が、それも次々に受け止められた。

肩に上げた剣が磐音の肩口に落ちてきた。

大包平が真綿で包むように応じた。

「おのれ！」

磐音は連続した攻撃を受け止めるだけで反撃しようとはしない。

若い旗本は顔を朱（あけ）に染めた、磐音の肩を右に左に疾風（はやて）のように襲撃した。そのことごとくが受け止められ、やんわりと跳ね返された。

「くそっ！」

叩きつけるように最後の一撃を振るった相手は、磐音が受け止める反動を利用してくるりと体勢を入れ替え、間合いを取った。

一間半。

荒い息遣いが昌平坂に響き、宮松の持つ提灯の明かりに若い剣士の顔が泣き顔のように歪んだのを由蔵は見た。

八双（はっそう）の構えを取った若い剣士は、一撃必殺の攻撃を覚悟した。

「おおおっ！」

雪崩れるように突進しながら八双の剣を磐音の眉間に叩きつけてきた。

低い姿勢で走り迎えた磐音が大包平を虚空にすりあげた。

峰に返された剣が初めて受け止めた。

振り下ろされる剣とすりあげられた剣が虚空で交わった。

火花（ひばな）が散った。

キーツ！

という乾いた音が響いた。

若い剣士の剣が柄本（つかもと）から折れて、神田川へと飛んでいった。

「これまで！」

磐音の声が凛然と響いた。

折れた剣を持つ剣士も後詰（ごつめ）の四人も呆けた（ほうけた）ように立っていた。

磐音は由蔵と宮松を無言で促すと、昌平坂を駆け下がっていた。

二